

本を選ぶ

高校図書館版

NO.71 2021年(令和3年)5月20日
<https://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス
〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

小川町のYA(ヤングアダルト) サービス

神原 和子

人口約3万人の埼玉県小川町に新図書館がオープンしたのは、ちょうど20年前だ。新図書館は旧図書館の10倍の広さ、今までの図書館になかったYAコーナーが計画に入ることになった。

当時YAコーナーを持つ多くの図書館は、

- ・グループでおしゃべりする場所がある
- ・YA向けの文庫をシリーズで置く
- ・YA通信の発行やノート、掲示板を設置する

など高校生が来やすい雰囲気を作っていた。小川町の図書館はその雰囲気も大切にしながら、約180㎡の広さにYA世代に読んでほしい本を中心に書架を作っていくことにした。『山なみの文蔵(ふみくら)』と名づけたコーナーを簡単に紹介しよう。

1階開架スペースから階段を上がり2階に着くと、自由な意見やイラストなどを掲示する壁面がある。次にコミック、軽読書用の文庫、新書など。中程の書架は学校・進学・仕事など関心の深いテーマの本を集めてある。

次に読んでほしい詩歌、物語、絵本など児童書や一般書からピックアップして配架した。

このスペースには、閲覧席が44席あり(1テーブル4人掛け)、いつでも勉強してよく、特に試

験期間中は満席になっている。この席の周りの書架には、図鑑・自由研究・辞書(貸出可)などを並べ、図書館訪問で来館したクラスで調べ学習にも使えるようになっている。外のテラスにもテーブル席があり、天気の良い日は心地よい風に吹かれて、おしゃべりに花を咲かせるグループもある。この席は飲食もでき、ここ以外にも図書館にはテラス席がそこにあり、くつろげるようになっている。(残念ながらコロナ禍の今、座席利用も制限がかかっている)。

高校生たちはどのようにこの図書館をしているのか。高校生になると場の使い方がうまいなと感じる。一人で来館する時は、一般開架の一人用のキャレルデスクを使い、静かにひたすら勉強する。友人同士で集まると外のテラス席で談笑。YAスペースの閲覧席では宿題やレポートの見せっこなど、TPOを弁えた利用をしている。時に調子によって大声をあげたり、こっそりお菓子を食べて注意されたりすることも(ゴミはちゃんと捨てようね)。ただ残念に思うのはごく一部の人を除き、あまり図書館で本を読んでいないし借りてもいけないことだ。他でその機会があるのならいいのだが。

そのためにも高校との連携は大事なことだと考える。よく利用する高校生が通う小川町の高校には立派な図書館があり、かつて何度か見学、お話を伺ったことがあるが、きちんとした連携が図れていない。高校生によりよい読書環境が作れるよう協力体制が作っていけるよう相互に手をさしのべていけたらと思う。(かんばら かずこ)

コロナ禍における学校図書館について考える その後

—発信することをあきらめない—

熊木 寛子

現任教2年目となりました

前回の原稿から半年が経つ。2021年に入ってから、1月、一日で最大50センチほど積もる雪に翻弄される。2月、初の大学入試共通テスト終了後は、コロナ禍で県外を行き来する受験生の図書館利用を制限することになり、思うように受験生の役に立てなかったのが心残りではあったが、在校生が図書館を使う機会が増えたので、よしとしよう。

そして3月、3年生の卒業を見送る。年度末の異動で図書館担当の教員も交代、4月、私自身も新しい気持ちで現任教2年目のスタートとなった。

感染症対策による休校から始まり、学校の雰囲気も全くつかめないまま過ごした昨年度は、一年経たないと、どうあがいても物事は分からないという至極当然な教訓だけが身に沁みだ。そのお陰か、今年度は、多少慣れた顔で過ごせるようになった気がしている。

Zoom でオリエンテーション

昨年の休校状態とは違い、生徒が年度初めから登校している今年度。新入生への図書館オリエンテーションは、図書館に来てもらって、そして対面で実施したいと考えていた。しかし、何かと慌ただしい学校では時間確保も難しく、かつ図書館内で大勢の生徒が集まる「三密」の状態は避けたい。迷いながら関係の先生方と話をするうちに、オンラインで全体オリエンテーションをしたい、図書館もその中でやって頂きますという話が、年度末に舞い込む。

本校では、昨年度以来、学年集会や大勢の生徒が集まる場の代わりに、各教室の電子黒板に動画が映し出される。リモートでの大学教授の講演、終業式や始業式、大学合格者の体験談、そして在校生が直接参加できなかった卒業式の視聴などで、オンライン会議システム Zoom が日常的に活用されている。新潟県内では恐らく先進的ではないかと思う。今年度も引き続き、対面で行う行事と、オンラインを活用する学年集会や講演会を、様子を見ながら使い分

けることになるのだろう。オンラインを活用した新入生オリエンテーションは、教務、進路指導、生徒指導などと共に図書館の話も並ぶことになった。

4月の入学式翌々日、課題テストが終わった午後。担当者はそれぞれ、教務室の片隅に設置されたパソコンの Web カメラに向かって話をする。

図書館に与えられた時間は、最後の 10 分間。昨年度、生徒向けに配信した動画に少し手を入れたいものを使って、3分ほどで図書館の様子を見てもらい、事前に配布した資料は各自見しておくようにと前置きして、自分が薦める一冊の本について話をした。取り上げた本は、この時期、桜や春の花の写真を撮るときに、必ず読み直している『もっと写真が好きになる』（菅原一剛、ソフトバンククリエイティブ、2007年）。

話をするにあたって、説明に立つ職員のプレゼン資料を取りまとめて進行して下さる学年主任の先生や、各クラスの電子黒板にパソコンを設置し、Webカメラをつけて、私たち話す側が生徒の反応を見ることができるよう設定する担任や副任の先生方の姿を目の当たりにした。年度初めの授業や諸活動の合間を、まさに縫うようにしての準備は目まぐるしい。その上で、司書として話ができるのはありがたい環境。対面オリエンテーションでなくとも、時間が短くても、対面以上のモノを伝えられたらという気持ちがわいてきた。

パソコンに向かって話をするという状況の中、話慣れていない自分の話は緊張のまま終わったが、実際に教室に配信された動画を見ていた先生方からは「よかったですよ」と声をかけられる。生徒も紹介する本や図書館の動画に集中していた様子だったようで、ホッとした。自分の役目は果たせたのだと思う。

新入生に対する読書啓発は、先生方からのアプローチも既に行われているので、あとはこの一年間、図書館がどのような仕掛けを作って、読書を働きかけていくのかが目下の課題である。



ディスプレイ「花を読む本」

＜藤の花＞がキーワードの漫画『鬼滅の刃』とともに、文学における＜藤の花＞のエピソードを紹介した『花を旅する』（栗田勇、岩波新書）を紹介する工夫を取り入れた。

巨大ディスプレイに四苦八苦

勤務校の図書館は歴史のある古い建物だ。昭和40年代後半に作られた、教室棟と特別教室棟の中間、管理棟3階をまるまる占める図書館の佇まいは、かつて自分がここで高校生活を過ごした頃から数十年、全く変わらない。

図書館入口には、古い学校でよく見かける、作りつけの「ショーケース」なるものが存在する。横2.5m、高さ1.2m、奥行き50cmの巨大なそれは、不器用でセンスのない私にとっては威圧でしかない。

しかし、あの空間は、利用者を図書館に誘い込む大切な場所。図書館からの情報発信を自ら放棄する訳にはいかない。苦手なことと正面から取り組む中で、展示のセンスは経験の積み重ねと、失敗の繰り返しであること、テーマはある日突然思いつくのではなく、計画と見通しを持って考えるものであることに改めて気づかされた。

一つの展示を作るのには、時間も手間もかかる。そして、気を抜くとあっという間に時が経ち、展示は古びてしまう。展示の完成は、同時に次のテーマに取りかかることを意味している。

ショーケースは、はめ殺しのガラス扉の向こうに本が並ぶため、本を手取るためには職員が取り出す必要があり、本は借りづらい状況にある。

にもかかわらず、時に「この本借りたいのですが」という声がかかるのは嬉しい。実際に展示した本の感想を書いた手紙を生徒からもらった時は、頑張ってたかったと心から思えた。

昨年度、苦しみながら取り組んだ展示テーマは、「花火の本」「図書委員生徒によるPOP作品」「地区司書おすすめの本」などだが、自信作を一つ、というと、本の表紙やデザインを担当するデザイナーや画家の作品を紹介する「ジャケ読み！」だ。本の表紙やブックデザインに注目してもらい

たいと考えたテーマである。

この分野はとても奥が深い。かつて、本にカバーがかけられることは少なく、全集本には特徴のある布が使われていたりしていたのが、いつしか本にはカバーがかけられることが当たり前となった歴史を、関連の書籍を読む中で知る。和田誠・寄藤文平などのブックデザインを作ってきたベテランから、鈴木成一・丹地陽子など、本のデザインや表紙絵で活躍する現在売れっ子の作家まで、様々な視点で本の紹介ができて、楽しい仕事となった。

今年度初回のディスプレイは「花を読む本」。図書館前に季節の花を活けてくださる先生がおり、そこからヒントを得て考えたテーマである。

花がキーワードとなる小説、花の生態が書かれた4類の本、花き類の開発や手入れに関する6類の本などを取り上げたが、自分が力を入れて紹介したいのは、やはり小説類。小川糸『とわの庭』や、湊かなえ『花の鎖』、東野圭吾『夢幻花』などを取り上げ、POPを書くためにじっくり読んだ。展示やPOPを一生懸命読んでくれている生徒の姿に、こちらが励まされている。

さて次のテーマは何にしようか？ この文章を目にする全国の皆さんのお知恵を、ぜひ拝借したい。

（くまき ひろこ：新潟県立長岡高等学校 司書）

郷土に軸足をおき世界を見る

山根 頼子

「視野は世界、視点は郷土」。沖縄県石垣島にある地元紙新聞社の社是だ。人口5万人の国境の小さな石垣島だが、広い視野をもち軸足はしっかりと郷土に置いて記事を書きますという決意だろう。今で言う「グローバル」だ。世界と郷土をクロスさせる探究学習に接するとき、この社是をよく思い出す。

中国の唐時代と東アジアの国々の関係を学んでいる1年生の世界史の授業でのことだ。その時代の中国の貨幣「開元通宝」が石垣島から出土するが、これがどのようにして渡ってきたのか、仮説をたてて立証しよう、という探究学習が計画された。

「なんて、おもしろい」教科担任から授業計画を聞き、図書館はさっそく資料の準備に取りかかった。しかし、蔵書は高校生には難しい本ばかり。比較的易しいのは、石垣市が発行している考古ビジュアルシリーズくらいだった。8巻発行されていて所蔵は各一冊のみである。早速、市に寄贈依頼をして数をそろえた。また、レファレンスに役立ちそうな知識もちゃっかりレクチャーしてもらいつつ、他の資料にもあたりをつけて授業の日に備えた。

とはいえ、こちら側があまり先走りすぎると、生徒の発想を狭める危険がある。生徒の反応を見ながら、資料は小出しに提示することにした。

担当教諭はいう。生徒へこの出題を伝えたとき、目が動き反応があったと。わかる。7世紀頃の中国と自分の住んでいる島が関係していたとしたら、好奇心がくすぐられるのは当然だ。教科書の記述が自分事に変化した瞬間だったのだろう。

そして生徒の仮説は面白かった。

仮説①「遣唐使が立ち寄った」たしかに、沖縄本島は遣唐使の南航路にあたり、鑑真も立ち寄った記録はある。開元通宝は間接的に伝わったのかも知れない。

仮説②「交易で得た」螺鈿の材料の夜光貝やジュゴンなどは交易品の代表格だ。なるほど中国との直

接交易も考えられる。

仮説③「難破船説」難破船から打ち上げられた陶磁器が今も海岸から見つかる。

外国船に水や食料を提供し、そのお礼にもらったという事も考えられると、市史編集室の職員は言っていた。当時の島の周辺海域は想像以上に国際色豊かで、外国船が往来し、港は補給基地の役割をしていたのかもしれない。

いよいよ授業の日、生徒と仮説を立証する本と一緒に探していく。探し方のコツは「動物的勘を全開にして、直観が働いた本は手に取り開いてね」「目次をよんで、本の概略をつかみ、自分に必要な記述があるのか探すんだよ」「全部読まないで拾い読みでOK」そして「使った本は必ずメモをするように」と私は叫ぶ。

コツどころか「まずは直観」と言っているのだが、郷土資料を使いこなすのは少し難しく、説明よりも慣れがいちばんだから、まずは手を伸ばして本を開くのが大切だと伝えたいのだ。

立証に使えるような文章の断片を発見して「あった」と嬉しそうに笑う生徒もいる。

発表は教室で行われるので、私は見ることはできなかったが、それぞれの論でひとときロマンの世界に遊んだことだろう。「勉強は最高の娯楽である」という説は正しいと思う。

世界史と郷土史をクロスさせると、二次元が三次元になるような面白さが加わる。文字が生命力を持って立ち上る感覚とでも言おうか、体温が生まれる。

沖縄県は、独特な歴史・文化・地理的状況があるので、教科書に記述されているような歴史の表舞台からもれた話などがたくさんある。郷土史の中にそれらを見出すとうれしいし、それにつながる歴史のトピックを身近に感じることがよくある。

たとえば、黒船のペリー提督は琉球を経由し浦賀へ行くが、船員が島民とトラブルをおこした記録が

あり、その顛末などが面白い。

また、亜熱帯気候なので動植物も本州との違いが著しく、桜前線も1月から南下していく。したがって動物・植物図鑑、星座などは、沖縄独自の本が必要となってくる。「県産本」とよばれる郷土関係資料の発刊も多く、本校の郷土資料は三千冊を超えている。

探究学習が教育課程の中に位置づけられてから、図書館の使い方が向上した。図書館からも「探究学習のために」と簡単なプリントを教師向けに出し、図書館教育の向上を願っている。

しかし課題は多い。図書館機能という目に見えないものを伝えることの難しさであったり、学校教育

の中に図書館教育を担う人が、専門性と時間を約束されてきちんと位置づけられていない現行制度が、図書館教育の発展に影を落としている。

それでも、目の生徒にとってなにが必要かという視点で行動する司書たちが全国には大勢いて、図書館教育を支えている。私にはそれが大きな励みになっている。

「主体的な学び」実現のために知識注入型の学びから一歩踏みだすことが今求められている。その一例を挙げたが、郷土や自分自身を軸足にしたグローバルな学びは今後ますます注視されていくだろう。そういう学びを支えられる図書館であり、学び続ける司書でありたいと思う。

(やまね よりこ：沖縄県立八重山高等学校)

伝記 **世界の思想家から学ぶ**
 未来を生きる道しるべ
 好評 **道徳の学習教材、調べ学習に最適の新シリーズ!!**



全5巻／揃え価格 本体 10,000 円＋税
 セット ISBN 978-4-389-50107-5
 分売価格：各巻 本体 2,000 円＋税
 A5判 各 152頁

清水書院

たとえことば辞典 新装版
 中学校1年生 「国語」(光村図書) 掲載図書
 中村 明 著
 定価 1,980 円 (本体 1,800 円＋税)
 ISBN 978-4-490-10805-7

日常生活やビジネスシーン、文章中で使われる比喩表現を4400語収録。比喩的思考で誕生した“ことば”の本質と意味とのつながりを明らかにすることにより表現のしぐさを解説する。


和食ことわざ事典
 中学校2年生 「新しい国語」(東京書籍) 掲載図書
 永山久夫 著
 定価 3,080 円 (本体 2,800 円＋税)
 ISBN 978-4-490-10850-7

“和食”をテーマに伝統的、歴史的なことわざに加え、食文化史の研究者である著者が、長年にわたって全国を回り取材を重ねて集めた、その土地に伝わることわざも多く掲載。

株式会社 東京堂出版 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-17
 TEL 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746

すごいぞ!
はたらく知財
 14歳からの知的財産入門
著作権? 商標? それって人生に必要な?


著作物、特許、商標、意匠など、ものづくりの仕事に必須のリテラシーが1冊になった知財入門書の決定版! 11の仕事に焦点をあて、そこに生まれる権利の正しい利用方法をわかりやすく解説します。 1500円



内田朋子・萩原理史・田口壮輔・島林秀行 著／桑野雄一郎 監修

晶文社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11
 Tel 03-3518-4940 http://www.shobunsha.co.jp

スター
 新時代の“スター”は誰だ
 作家生活10周年記念作品
 新人の登竜門となる映画祭でグランプリを受賞した立原尚吾と大土井紘。ふたりは大学卒業後、名監督への弟子入りとYouTubeでの発信という真逆の道へ。受賞歴、再生回数、完成度、利益、受け手の反応——。作品の質や価値は何をもって測られるのか。私たちはこの世界に、どの物差しを添えるのか。



著: 朝井リョウ
 定価 1,760円(税込)/NDC913/四六判/388頁

ASAHI 朝日新聞出版